

トーマス・マンと「市民」

中谷博幸*

本稿は『非政治的人間の考察』や、トーマス・マンがドイツやゲーテに関して行った講演、とりわけ『ドイツ共和国について』、『ゲーテとトルストイ』、『市民時代としてのゲーテ』、『ドイツとドイツ人』、『ゲーテと民主主義』を中心に、彼が使う市民Bürger、市民性Bürgerlichkeit、市民的bürgerlichといった言葉がどのような広がりをもっているかを検討する。すなわち市民概念を考察する^①。本稿の具体的な課題は次の点である。第一に、トーマス・マンの芸術家としての在り方の特徴はどのようなものか。第二に、トーマス・マンにおけるゲーテの意義は何か。第三に、とりわけ1945年の『ドイツとドイツ人』の講演をどのように理解するか。これらの検討は二十世紀ドイツ読書人の教養概念がもつ問題の一面を明らかにすることになるであろう。

I

まず、1915年に書き始められて1918年に出版された『非政治的人間の考察』の内容から検討しよう。トーマス・マンの市民概念の基礎はこの書物にある。

市民Bürgerはブルジョワbourgeoisではない。これが『非政治的人間の考察』におけるトーマス・マンの基本的な見方である。ブルジョワと対比された市民はどのような特徴をもつのだろうか。

ブルジョワはフランス革命^②によって貴族にとってかわった第三身分の子である。彼らの精神は「啓蒙主義、理性、進歩」、すなわち「文明」であり、民主主義である^③。彼らの特徴は政治的である。一方、市民の起源はハンザ諸都市に見いだせる。「ドイツの歴史において聖職者と騎士の時代のあとにつづく市民時代、すなわちハンザの時代、都市の時代は、純粋に文化の時代であって、政治的な時代ではなかった。市民は、騎士の政治的遺産を相続しなかった^④。」市民とはすぐれてドイツ市民である。彼らは「国家が人間存在の目的であり意義であるとか、人間の使命は国家につきるとか、政治は生活をいっそう人間的なものにするとかいうようなことを、けっして信じるようにはならないであろう^⑤。」トーマス・マンにとって、市民対ブルジョワは、ドイツ対西ヨーロッパとりわけフランス、を意味した。

また、トーマス・マンは次のように語る。「人間としても芸術家としてもかれ [ワーグナー] の人格のなかには、市民的な要素ばかりでなく、まさにブルジョワ的、成金的な要素の混入さえ見いだされる。豪奢なもの・『縞子』・華美・富裕・市民的華麗さなどへの好み——これは、まず私生活に見られる特徴であるが、精神的芸術的な次元にもふかく入りこんでいる。・・・しかし、すこしばかりブルジョワ的であったにしても、ワーグナーはまた高度の、ドイツ的な意味に

* 助教授 教育学部（歴史学）

において市民でもあった⁶⁰。」また、1830年代のパリのボヘミアンたちの目にしたブルジョワは、「およそ芸術的美感というものを持たない成金者、頑迷で、実利しか考えていない人間たち⁶¹」であった。一方、トーマス・マンは、ショーペンハウアーの市民的要素として、「日常生活におけるカント的杓子定規的な不変性、十分な生理学的知識にもとづく賢明な健康管理（いわく——『分別のある人間は、快楽をもとめず、無痛をもとめる』）、資本家としての綿密さ（一ペニヒももらさず記入しておいたし、ささやかな資産をうまく運用して、一生のあいだに二倍にふやした）、仕事をする上での平静さ、ねばり強さ、無駄とむらのないこと」、すなわち「誠実さと実直さ」を指摘している⁶²。

以上の市民とブルジョワとの比較から、市民性、すなわちドイツ的市民性の二つの要素を取り出すことができるであろう。第一に非政治的であること。「国家的社会的なもののなかに吸収されつくしてしまうことのない部分、このアトミスト的個人主義的な部分、これこそ、ドイツ市民にとってはほとんど人間性そのものである⁶³」。非政治的であることがドイツの自由、ドイツの教養の特徴である。もうひとつの要素は非審美的、非耽美的であること。「耽美的態度Schönseeligkeitは、この世で最も非ドイツ的であると同時に、最も非市民的なもの⁶⁴」であり、『ブッテンブローク家の人々』以前においてディレッタンティズムとしてとらえられていたものである⁶⁵。市民は「誠実さと実直さ」を核とした堅実な生活を営む。

上述したようなブルジョワと市民との区別を基にして、トーマス・マンはそれぞれに対応した芸術家が存在すると考える。彼は二つの芸術家タイプを批判の対象にしている。彼らはともにブルジョワ的性格をもつ。ひとつは、ルカーチの分類によれば、「ニヒリスティックな仮面として市民的生活をいとなんでいたにすぎないフローベールの修道士の審美主義 Mönchsästhetizismus⁶⁶」である。彼らは「作品のために生を禁欲的に否定する⁶⁷」。これはトーマス・マンによればすぐれてフランス的である。彼が批判するもうひとつの芸術家タイプはドイツの急進的文士である文明の文士 Zivilisationsliterat である。彼らは、フランス流の文明をドイツに移植しなければならないと考え、ドイツの政治化、民主主義化をはかる。第一次世界大戦を期に、トーマス・マンが『非政治的人間の考察』で批判の対象としたのは、この文明の文士であった。

これに対してドイツ的市民性に対応する市民的芸術家は、どのような特徴をもつのか。彼らは市民性に対して感情的 sentimentalisch な関係にたつ。彼らは市民性と芸術との中庸にたつイロニカー Ironiker であって急進主義者ではない⁶⁸。「ぼくは、ふたつの世界のあいだに立っていて、そのどちらにも住みつくことができず、そのために生きていくのがすこしばかりむずかしい」というトニオ・クレーガーの言葉は、市民的芸術家の特徴をよく示している。トニオ・クレーガーは「市民性と芸術家気質との間に位置するイロニー的中間的存在」であり、その点で「ドイツ的なロマン主義の末裔」である⁶⁹。彼らには「審美的なものに対する倫理的なものの優越」が存在する。何よりもトーマス・マン自身がこの市民的芸術家に属する。トーマス・マンの場合「本当のところは、『芸術』は、自分の生を倫理的に実現させるための手段にすぎない。「わたしにとって大事なのは『作品』ではなくて、わたしの生である⁷⁰」。

芸術家であることは、市民性の特徴である、誠実さと実直さを中心とする市民的エートスと非政治的性格とを排除しない。「市民的芸術家とは、実現されたパラドクス……二重性をもった、分裂を秘めた存在形式」である⁷¹。そして、トーマス・マンによれば、このような市民的芸

術家の性格は彼らにのみ特徴的であるばかりでなく、まさにドイツ人全体の特徴であった。それ故、イロニー的存在、ロマン主義的特徴は、ドイツ人にとっても、その本質に関わる問題であったのである。そしてそれは何よりも、典型的な市民的芸術家、ドイツ人であるトーマス・マン自身の避けて通ることのできない問題でもあった。

彼はまた、「ドイツ的市民性と人文主義的教養との結合」である世界市民 Weltbürger という言葉を使っている。これはコスモポリタニズムにあたるドイツ語であり、「『市民』という言葉と概念そのものにも世界という意味、国境の解消をあらわす意味が内在している⁽²⁰⁾」。ドイツ人は、この世界市民として、ヨーロッパ人であり得る。それは超ドイツ性 überdeutsch であるが、「ドイツ性の抹消や除去」ではなく「ドイツ性の昇華」としてあらわれる⁽²¹⁾。ショーペンハウアーやワグナー、ニーチェはそのような意味で世界市民であった。トーマス・マンがショーペンハウアーやワグナー、ニーチェに惹かれていったのも、彼らの世界市民としての性格であった。世界市民については、トーマス・マンの後の講演を検討する時にさらに取り上げることになるであろう。

II

『非政治的人間の考察』でトーマス・マンは次のように述べている。文明の文士は「ある発展をのぞみ、それを推進している。わたしも、その発展を必然的だと思い、というのは、不可避だと思い、自分でも自分の資質に応じて無意識ながらある程度はそれに参与してきた。が、だからといって、歓声をあげてまでその発展を声援すべき理由が、わたしにはわからないのだ。かれは、鞭と拍車をもってある進歩を促進している。わたしも、その進歩がとどめがたいもの、運命としてあたえられたものであると思うことがすくなくとも稀ではないし、それを自分なりにささやかながら促進するのが、わたしの運命でもある。しかし、それにもかかわらず、わたしは、さだかならぬ理由から、この進歩にたいしてある種の保守的の反対を表明する……。わたしのいうことを十分に理解していただきたい。わたしは、こう考える。進歩を不可避的なもの、運命としてあたえられたものと見なしながらも、だからといって、にぎやかな鳴りもの入りの喚声をあげてこれをうしろからけしかける気持ちには全然ならないということもありうるのだ。⁽²²⁾」この進歩は、彼の市民概念を使って表現すると、ドイツ市民のブルジョワへの変身である。市民がブルジョワへと変わっていくのは時代の流れとしても、自分はそれを促進する気にはなれない、と彼は考えるのである。彼が『ブッデンブローク家の人々』でやろうとしたことは、市民からブルジョワではなく、市民の芸術家への発展であった。第一次世界大戦が始まるとともに、トーマス・マンはドイツのその戦争を肯定し、文明の文士たちに反対を表明した。彼は第一次世界大戦を文明に対して文化を守る戦い、市民の政治化を防ぐ戦いとして把握していた。

彼は『非政治的人間の考察』でははっきりと、共和制でなく君主制の支持を表明していた⁽²¹⁾が、その4年後の1922年の講演『ドイツ共和国について』では共和国の支持を宣言するに至る。トーマス・マンはその講演を「共和国万歳」で結んだ。この共和国支持へとマンをいたらせた外的要因は、1922年6月24日に右翼による外務大臣ラーテナウの暗殺であったとされている⁽²²⁾。

トーマス・マンはこの講演において、民主主義と共和国をドイツ・ロマン主義と結びつけよう

とする。その際彼は『非政治的人間の考察』の市民性の非政治的性格に修正を加えねばならなかった。「国家なき人間は野蛮人である。すべての文化は国家との関係の中から生ずる。教養が高まれば、教養ある国家を構成する成員は多くなる」、というノヴァーリスの言葉を引用して、それを次のように解釈する。「教養ある国家の成員としての教養ある人間、ところで、これは政治的人間性であります。これは精神的国民的な活動と国家的活動との統一であり、私たちは長い間これを知らないできましたが、今や願わくはこの統一を回復したいものであります。一言で言えば、それは共和国であります⁽²³⁾。」この「内面的であると同時に国家的であり、貴族的であると同時に社会的である」人間性 Humanität を、ドイツ的、ゲルマン的と呼んだ⁽²⁴⁾。そして、この人間性 Humanität を、彼は「一方では審美主義的個別化と、他方では一般的なものの中に個人が品位もなく埋没してゆくこととの間に、神秘主義と倫理との間に、内面性 Innerlichkeit と国家性との間に、また一方で死と結びついて倫理的なもの・市民的なもの・価値を否定する立場と、他方で浅薄明快に道徳的な理性万能の俗物主義との間に」位置づけ、それをドイツ的中庸と名づける⁽²⁵⁾。

このためにトーマス・マンは、「ロマン主義を戦争と死への賛美から引き離し、生への賛歌として再解釈しようとした⁽²⁶⁾。『ドイツ共和国について』では、ホイットマンとノヴァーリスを結びつけることによって、それを試みたのであるが、ロマン主義と戦争・死との結びつきを克服し、「生」と民主主義を積極的に結びつけていくためにトーマス・マンが依拠しようとしたのが、ゲーテである。『ドイツ共和国について』の講演前後に、彼はゲーテと取り組んでいた。1921年9月4日にリュベックで『ゲーテとトルストイ』という講演を行ない、それは翌年3月には『ドイチュ・ルントschau』に掲載された。そしてその原稿はさらに大幅に改訂されて、1925年に出版された評論集『ベミュウンゲン』に収められる。その後も、トーマス・マンはしばしばゲーテに関して講演を行なう。今、主なものをあげると、『市民時代の代表者としてのゲーテ』（1932年3月プロイセン芸術アカデミー）、『作家としてのゲーテの経歴』（1932年3月ワイマル）、『ゲーテのファウストについて』（1938年11月プリンストン大学）、『ゲーテと民主主義』（1949年5月オックスフォード大学）などがある。次に、1925年版の『ゲーテとトルストイ』と、『市民時代の代表者としてのゲーテ』、そして『ゲーテと民主主義』を取り上げ、生と民主主義、市民性の関連を検討したい。

III

『ゲーテとトルストイ』において、トーマス・マンは、シラーの『素朴文学と情感文学について Über naive und sentimentalische Dichtung』（1795-96）に基づいて、一方にゲーテとトルストイ、他方にシラーとドストエフスキーという、二つの芸術家類型を考える。

ゲーテやトルストイは「偉大なる生命力、祝福に満ちた人間の自然、高遠なる神の人⁽²⁷⁾」であり、彼ら自身が「自然そのもの」である。彼らは自己自身への愛を基礎にして、その創作活動を自伝に向ける。その芸術は、「客観的な、自然と結びついた、創造的な熟視」である造形的志向をもつ。彼らは意志の自由を否定し、自然に従う。「自然」は、トーマス・マンが他の著作や講演で「生」としてあらわすものに等しい。

他方、シラーやドストエフスキーは、「自然」ではなく「精神」である。「精神」とは「自然からの分離、離脱、疎隔」であり、「人間、すなわちこの自然から高度に解き放たれて、極端に自然と対立しあっているものと自ら感じている存在を、他のあらゆる有機的存在からひきはなし、きわだたせているもの⁽²⁸⁾」である。その芸術は批評であり、「人生と自然に対する道徳主義的・分析的態度」である⁽²⁹⁾。

トーマス・マンは「自然」と「精神」をこのように対比するが、両者は全く対立するのではなく、イロニー的關係に立つ。「精神」は「自然からの分離、離脱、疎隔」であるが、「道徳的な情感的人間に、自分の側から、自然の貴族に対して、その逆の場合よりもはるかに深く、あざやかな恭順の念を表明する用意がない場合には、彼は決して情感的な人間ではありえない⁽³⁰⁾」。自然に対して情感的 sentimentalisch な關係に立つこの「精神」の立場は、ロマン主義的なものであり、『非政治的人間の考察』で考察した、市民性に対して情感的な關係に立つ市民的芸術家の立場に等しい。他方、「自然」も「精神」に対して情感的な關係に立つ。ゲーテのこの「精神化の過程は同時に民主主義化の過程」である⁽³¹⁾。

トーマス・マンはこの講演のタイトルを何故『ゲーテとトルストイ』と名づけたのであろうか。彼のこれまでの市民的芸術家としての活動は、「精神」の立場にたつものである。それ故、「自然」を求めざるをえない。トーマス・マンは「自然」の典型としてゲーテとトルストイをあげたが、ゲーテは「自然」としての自己をはっきりと自覚していたのに対して、トルストイはそれを自覚していなかった。そこから、トルストイの場合、「拙劣な精神化」、「虚偽の自己否定」が生じる⁽³²⁾。さらに彼の場合には、反ピョートル的、反西欧的、反進歩的なアジア主義が存在する。トルストイはボルシェヴィキの変革によるヨーロッパからアジアへの転回の預言者であった⁽³³⁾。トーマス・マンがとりわけゲーテを自らに、そしてまたドイツにとって必要な存在だと考えていたのは明らかであろう。

トーマス・マンは1925年の時点において、ドイツは、「ロマン主義的な野蛮」であるドイツファシズムではなく、また「トルストイの教育上のボルシェヴィズム」でもなく、人文主義的伝統を守ってゆくべきことを訴える。イロニー、すなわち中庸のパトスによって、真の人間性が達成される。「情感的な憧憬の交互性（というのは、私たちが見てきたように、情感的なのは精神だけではないからです）、即ち、精神の子らの自然への努力、自然の子の精神への努力は、より高い統一が人類の目標であることを示しています。そしてより高い統一のゆえに、真にあらゆる努力の最高の担い手である人類に、その本来の名前、即ち人間性（フマニタス）という名前が与えられるのです。ドイツ人という世界市民的・中庸的な民族の、留保的な自己保存の本能こそが、真の国家主義です⁽³⁴⁾。」この文章から、次のように言うことができるだろう。すなわち、「苦悩するロマン主義的存在」であるトーマス・マンとドイツにとって、もっとも重要な存在はゲーテであった。

1932年の『市民時代の代表者としてのゲーテ』では、ゲーテの「自然」と市民性との関連が中心的なテーマとして取り上げられる。この講演では「自然」を生の市民性 Lebensbürgerlichkeit という言葉で表現する。それは「ペシミズムを超越した生の肯定」であり、「生のなかに広く足をふまえて立つことであり、自然から特権と恩寵を与えられている者の生の貴族主義」である。トーマス・マンは生の市民性が「市民性の最も高い最も普遍的な形式をなしているように思う」

とさえ述べる⁽³⁵⁾。この生の肯定は健康なもの、厳格な徳性、倫理的なものを肯定するばかりではなく、過度の緊張や病気も自然の状態として肯定する。ある時エッカーマンはゲーテに、バイロンの道徳のうさんくさを非難した。これに対してゲーテは次の様に答えた。「何故いけないのかね。バイロンの勇敢さ、大胆さ、雄大さ、これはすべて人間形成に役立つではないか。われわれは教養に役立つものを、つねにあくまで純粋な、倫理的なものうちにばかり求めようとしないように気をつけなければならない。およそ偉大なものはすべて、われわれがそれに気づきさえすれば、教養に役立つものだ。」トーマス・マンはこのゲーテの言葉を引用して、それを超市民的 *überbürgerlich* と呼んでいる⁽³⁶⁾。

『非政治的人間の考察』では市民性のひとつの大きな要素は、非審美的・非耽美的な「誠実さと実直さ」を核とする市民的エートスであった。ゲーテの生の市民性は、この市民的なエートスを内面化し普遍化していったものと考えられるであろう。しかし、内面化されたからといって、もともとの市民的エートスから離れるのではなく、あくまでそれを基礎としている。生の市民性には「感受性とねばり強さ」がその根底に存在する。では市民性のもうひとつの要素であった非政治性はどうか。

トーマス・マンはこの講演でもシラーとゲーテの対比を行なう。「[[ゲーテを] 純ドイツ的な非愛国者と呼ぶことができるとすれば、[シラー] はそれに反して国際的な愛国者です。シラーは市民的な理念を、政治的民主主義的な意味において提示していますが、ゲーテはそれを精神的文化的な意味において代表しています。何故なら、彼にフランス革命を非常に怖ろしい敵対的なものと感じさせたものが、彼のこの精神的文化的な市民性であったことを私たちは知っているからです⁽³⁷⁾。」そういう点でゲーテはまさにドイツ市民であった。しかし政治的なものを否定し保守的な心情の持ち主ではあったが、彼は決して反動的ではなかった。そして、トーマス・マンは、ゲーテの晩年の小説である『遍歴時代』の中に、「古典的市民的な文化概念」、「個人主義的な人間性」の克服を見出す。そこには「共同体という概念、連帯という概念が登場」する⁽³⁸⁾。ゲーテは晩年にパナマ運河やスエズ運河といった「ユートピア的な全世界の技術的な問題」に強い関心を抱いていた。トーマス・マンは次のように語る。「彼の眼は自国だけに局限されてはいませんでした。彼の未来に対する喜びは広大であって、全世界という広がりが必要としたのでした。他国民の生活の向上、幸福、あるいは災禍は、自国の国民の運命におとらず彼には切実なものでした⁽³⁹⁾。」このような世界的連帯性は、彼の市民的な精神世界から生まれ出たものであり、この市民性には「自分自身を止揚し転化させる」一種の精神的超越性が備わっていた。この市民性は同時に超市民的 *überbürgerlich* なものであった⁽⁴⁰⁾。これは『非政治的人間の考察』で述べられた世界市民に連なる考え方である。また1949年の『ゲーテと民主主義』の講演では、それを「際だった超ドイツ的ヨーロッパ的特徴」、「ヨーロッパ的ドイツ」と呼んで、ナチスドイツの「ドイツ的ヨーロッパ」と対照させている⁽⁴¹⁾。トーマス・マンは『市民時代の代表者としてのゲーテ』の最後で、超市民性の可能性を秘めた市民性に立って、「はなはだしい情緒性や、生と矛盾するイデオロギー」、民主主義の敵たちに抗して、合理的な外的秩序をつくりだしていくことを訴えた⁽⁴²⁾。

以上のような検討により、1932年の『市民時代の代表者としてのゲーテ』では、トーマス・マンはゲーテの市民性に見られる自己を超越していく特質、超市民性、世界市民の中に民主主義に

連なる可能性を見出そうとした、と言っているであろう。1949年にオックスフォードで行なわれた『ゲーテと民主主義』では、そのような試みを支えるものとして、ゲーテの「生」の肯定と民主主義とを結びつけようとする。

ところが表面的に見た場合、実際ゲーテには、反民主主義的な事柄が存在する。たとえば、彼はフランス革命に対して否定的であり、「出版の自由、大衆の発言、憲法、多数決による支配などに反対⁽⁴³⁾」であった。彼は平和主義的でなかったし、自由主義政体を信用していなかった。それ故、ゲーテと民主主義とを結びつけようとするならば、「物事を根本まで究めて考えなければならず、民主主義的という概念を極めて広く解釈しなければならない⁽⁴⁴⁾」。トーマス・マンはその結びつきをゲーテの「生」の肯定に見出す。

トーマス・マンは、「精神と権力、思想と行動の間のドイツ的乖離、文化の高さと政治の惨めさの間の矛盾⁽⁴⁵⁾」といったドイツの問題点を取り上げ、ゲーテの「生」の肯定はこの矛盾を橋渡しするものであることを指摘する。トーマス・マンによれば、ゲーテは精神、思想、文化の一面的な強調に対して、実際の分別 *praktisches Verstand* を対置し、現実から遊離せず、生と一体化することを主張した。これは「民主主義的プラグマティズム」と呼べるものである。これはドイツにおいて常に欠如していた⁽⁴⁶⁾。

このゲーテの立場を彼はさらにリルケやノヴァーリスのような芸術家の立場と比較する。「芸術の貴族的孤独、生から離反した芸術の苦渋に満ちた隠棲」に価値をおくリルケのようなあり方からすれば、ゲーテの立場は「芸術を捨てて生の側に走る裏切り行為⁽⁴⁷⁾」であった。しかしトーマス・マンからすればゲーテの立場は、私たちがすでにしばしば確認してきたイロニー的立場である。一方リルケの立場はイロニーを失った芸術家気質である。後者には、没落への衝動、死の礼讃が潜んでいる。それに対して、ゲーテには「生き延びようとする衝動」が存在し、詩的没落、ドイツ・ロマン主義的な死の礼讃に抵抗した。ゲーテに見られる調和、均斉、古典性は、そのような彼の強い生き延びようとする衝動によって成り立つものであった⁽⁴⁸⁾。彼には「揺るぎもなく偉大な人間性と、信頼するに足る善意」があった。「あらゆる矛盾はここで高貴な、ほとんど神々しいような形で解消する。ゲーテの政治的世界観の中で食い違ってしまうかみあわないように見えるものも、もっと深い洞察力をもって見れば、この誤りなき人間性のうちで解消する⁽⁴⁹⁾」。

ゲーテの「生」の肯定が民主主義と係わるというトーマス・マンの主張は、『ゲーテと民主主義』においては、主に二つの点から述べられていると言っているであろう。第一に、それは精神と権力、思想と現実、文化と政治というドイツ的な分裂を橋渡しする可能性をもっているからである。第二に、それはとりわけロマン主義的な死の礼讃に抵抗しうるからである。

IV

「精神性、芸術家気質、詩文学などといったものは、必ずや地上的生活についての高貴なる無能力、不適格に帰着すると私は考えていた⁽⁵⁰⁾」と発言しているように、トーマス・マンの出発点は審美的なものであった。しかし、彼の魂は芸術至上主義的な単純なものではなく、たえず生への感情的な関係を有していた。ここに、市民的芸術家というイロニー的存在が成立する。イロ

ニー的なあり方⁽⁵¹⁾は、『非政治的人間の考察』以来、彼の一貫した特徴である。

彼は自らの芸術家としての存在を、芸術と市民性とのイロニー的關係として理解した。そしてさらに、このようなイロニー的な在り方は彼自身の立場であるばかりでなく、ドイツ・ロマン主義、そしてドイツ人そのものの在り方であると考えた。彼は物事を基本的に二項関係として理解する。精神と権力、思想と行動、文化と政治、精神と自然、精神的自由と政治的自由、思弁的要素と社会的政治的要素、といった対立。このような対立項が分裂に終わるのではなく、イロニー的な関係に立つこと、すなわち中庸的立場に立つことをすぐれてドイツ的であるとみなした。

以上により、本稿の二つの課題、すなわちトーマス・マンの芸術家の特徴と、彼にとってゲーテがどのような意義を有していたかは、明らかになったと思われる。次に最後に『ドイツとドイツ人』をどのように理解するかという問題を取り上げることにしよう。この講演は本稿で取り上げた他の書物や講演とはイロニーの取り上げ方が異なっているのである。

しかし二項関係にあるものは、イロニー的な在り方ではなく、絶えず対立と分裂へと向かう危険性をもっている。トーマス・マンの生涯を通じての課題は、この対立と分裂を克服して、いかにイロニー的な在り方を確保しうるかということにあった。『非政治的人間の考察』はそのための最初の一步であった。そして、前述したように、イロニー的な在り方は、彼自身の立場であるばかりでなく、トーマス・マンにとってドイツ人の特徴でもあったので、彼の課題は同時にドイツ人の課題ともなった。彼はあくまで芸術家である。それ故、当然のこととして、彼の芸術家としての課題がドイツの課題を規定する。ここに、彼の問題の捉え方の特徴と独自性があると言えるだろう。そして芸術家としての彼自身の課題とドイツの課題は、そのような点からロマン主義の問題として意識されていくのである。

この課題に彼はあくまでドイツの文化的土壌を基盤にして立ち向かった⁽⁵²⁾。その際に重要となっていたのがゲーテである。この過程で彼の市民性概念が深められていく。当初彼が芸術家としてイロニー的な関係に立とうとしたのは、彼自身の家系において受け継がれてきた、ハンザ都市の堅実な市民生活のエートスであった。この生活様式としての市民性は、彼の生涯にわたって存続した。彼の膨大な作品は実に規則正しい日課の中で勤勉に生み出されていった。「たとえば、毎日、朝のコーヒーのあとは身づくろいを正し、正確に九時から一時まで仕事部屋に入って、一心不乱に執筆をした。休暇中も亡命中も、終生これを怠らなかつた。締切に追われて深夜、徹夜して原稿を書きなぐるなどということはけっしてなかつた⁽⁵³⁾」。この生活様式としての市民性は、ゲーテによって生の市民性へと高められ、トーマス・マンはこれによって彼自身とドイツの課題・問題点であるロマン主義を克服していこうとした。そして彼自身とドイツの市民性が本来もっている非政治性を克服し民主主義的要素をなんとか取り込んでいこうとしたのであった。

彼自身においては二項対立を乗り越えイロニー的な立場をとることに成功したとはいえ、ドイツにおいては結局、分裂・対立に到ってしまった。このような理解と反省に立ってなされた講演が、ドイツの無条件降伏（5月8日）の三週間後の1945年5月29日、ワシントンの国会図書館講堂でアメリカ人を前に行なった『ドイツとドイツ人』である。本稿で取り上げたゲーテに関する講演では、トーマス・マンは、ドイツの市民性の肯定的側面、民主主義に連なる側面を必死に見つけだそうとしたのに対して、『ドイツとドイツ人』ではイロニー関係は破綻し、現実の分裂と対立を出発点として論じていく。

思弁的要素と社会的要素との分裂、内面的自由と政治的自由（市民の自由）との分裂、「思弁においてはこの上なく大胆でありながら政治的には成人の域に達していないというドイツ人の分裂⁽⁶⁴⁾」、ドイツの教養概念と政治的要素との分裂、この二項関係の分裂にドイツの悲劇性を見出す。政治と理念とは本来イロニー関係に立つものである。「政治に適し政治に生まれついた民族は、事実また本能的にも、良心と行動、精神と権力との政治的統一を、少なくとも主観的には常に維持するすべを心得ている⁽⁶⁵⁾。しかしドイツでは両者は完全に分裂する。トーマス・マンは次のように語っている。「人間が自然界にのみ属しているのではないのと同様に、政治も悪の中にのみ包括されるものではないのです。政治がその理念的精神的成分を完全に放棄してしまうならば、つまり、その本性の中にある倫理的で人間的にまともな部分を完全に否定し去って、政治を余すところなく不道徳で下劣なもの、虚偽、殺人、欺瞞、暴力に還元してしまうならば、もはやそれは悪魔的で破滅をもたらすものに変質してしまい、人類の敵になりはてて、妥協に基づくことも多いその創造性を恥ずべき不毛性に逆転させてしまうことになるのです。もしそうならまえば、・・・創造的に仲介し現実化するイロニーではありません。⁽⁶⁶⁾」この結果、ドイツ人にとっては政治は悪となり、政治のためには悪魔となり果て、世界と自己とを破壊してしまった、と批判する。

政治から切り離された内面性Innerlichkeitを生み出したルターとその内面性の典型としてのドイツ・ロマン主義を彼は特に取り上げ批判する。『ドイツ共和国について』ではロマン主義に共和制の可能性を見ていた。しかし、1925年の『ゲーテとトルストイ』では、ドイツ・ファシズムを「ロマン主義的な野蠻⁽⁶⁷⁾」と呼ぶ。そして『ドイツとドイツ人』でロマン主義を最も激しく非難する。このロマン主義批判に、芸術家としての自己の克服すべき課題とドイツ人全体の克服すべき課題を重ね合わせていたトーマス・マンの特徴がよく現われてくる。内面性としてのロマン主義の最大の問題点は、それが「抽象的理性に対する、浅薄な人道主義に対する革命的な反抗として非合理的な生命力を擁護する」にもかかわらず、「このような非合理的なものと過去への没入を通して死との深い親近関係」をもっていたことである。このロマン主義の病気と死の萌芽が生き続け繁殖し、ヒトラーの蛮行となって爆発した⁽⁶⁸⁾、とトーマス・マンは結論づけた。

注

- (1) トーマス・マンの著作はThomas Mann, Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, S. Fischer Verlag, Frankfurt a.M. 1990(以下、TMGWと略記する)を使用。なお、引用にあたっては、『非政治的人間の考察』上・中・下(前田敬作・山口知三訳、筑摩書房、1968～1971年)、『講演集 ドイツとドイツ人 他五編』(青木順三訳、岩波文庫、1990年)、『ゲーテとトルストイ』(山崎章甫・高橋重臣訳、岩波文庫、1992年)、『講演集 ゲーテを語る』(山崎章甫訳、岩波文庫、1993年)の訳文を借用した。ただし一部変更した部分もある。
- (2) トーマス・マンはフランス革命を市民革命bürgerliche Revolutionと表現する場合もある。このようにブルジョワ的と表現されなければならないところを、のちの講演等においても市民的と書き表わすことがしばしばある。そのため、市民的bürgerlichという形容詞表現は、ブルジョワ的と対立した市民的という意味以外でも使われ、注意を払わねばならない

場合がある。

- (3) TMGW XII, S.51f、『非政治的人間の考察』（以下『考察』と略記する）上、72頁。
- (4) TMGW XII, S.114、『考察』上、168頁。
- (5) TMGW XII, S.136、『考察』上、204頁。
- (6) TMGW XII, S.108、『考察』上、159頁。
- (7) TMGW XII, S.135、『考察』上、203頁。
- (8) TMGW XII, S.107、『考察』上、158頁。
- (9) TMGW XII, S.137、『考察』上、204-205頁。
- (10) TMGW XII, S.107、『考察』上、157頁。
- (11) 野口達人『若きトーマス・マンにおける世紀末とフランス』（近代文藝社、1995年）、182頁、ハルトムート・ベーメ「第三章 市民的小説における歴史と社会」（ヤン・ベルク他著『ドイツ文学の社会史』上・下、法政大学出版局、1989年）、513頁。
- (12) TMGW XII,S.103、『考察』上、152頁。
- (13) TMGW XII,S.103、『考察』上、151頁。
- (14) TMGW XII,S.568、『考察』下、301頁。
- (15) TMGW XII,S.91f、『考察』上、131-132頁。
- (16) TMGW XII,S.104f、『考察』上、153-5頁。
- (17) TMGW XII,S.108、『考察』上、160頁。
- (18) TMGW XII,S.115、『考察』上、170頁。
- (19) TMGW XII,S.135、『考察』上、202頁。
- (20) TMGW XII,S.67、『考察』上、95-96頁。
- (21) TMGW XII,S.436、『考察』下、13頁。
- (22) 『考察』下「解説」、363-364頁。
- (23) TMGW XI,S.833f、『講演 ドイツとドイツ人 他五編』（以下『ドイツ』と略記する）75-76頁。
- (24) TMGW XI,S.835、『ドイツ』、78頁。
- (25) TMGW XI,S.852、『ドイツ』、104頁。
- (26) 脇圭平『知識人と政治』（岩波新書、1973年）、130頁。
- (27) TMGW IX,S.77、『ゲーテとトルストイ』、43頁。
- (28) TMGW IX,S.80、『ゲーテとトルストイ』、48頁。
- (29) TMGW IX,S.87、『ゲーテとトルストイ』、61頁。
- (30) TMGW IX,S.97、『ゲーテとトルストイ』、79-80頁。
- (31) TMGW IX,S.125、『ゲーテとトルストイ』、129頁。
- (32) TMGW IX,S.74f、『ゲーテとトルストイ』、38-39頁。
- (33) TMGW IX,S.165、『ゲーテとトルストイ』、198頁。
- (34) TMGW IX,S.172、『ゲーテとトルストイ』、209頁。
- (35) TMGW IX,S.320f、『ゲーテを語る』、47-48頁。
- (36) TMGW IX,S.324、『ゲーテを語る』、53-54頁。

- (37) TMGW IX,S.314、『ゲーテを語る』、36頁。
- (38) TMGW IX,S.329f.、『ゲーテを語る』、64頁。
- (39) TMGW IX,S.331、『ゲーテを語る』、66頁。
- (40) TMGW IX,S.329、『ゲーテを語る』、63頁。
- (41) TMGW IX,S.757、『ドイツ』、157頁。
- (42) TMGW IX,S.331f.、『ゲーテを語る』、66-69頁。
- (43) TMGW IX,S.767、『ドイツ』、173頁。
- (44) TMGW IX,S.762、『ドイツ』、165頁。
- (45) TMGW IX,S.758、『ドイツ』、158頁。
- (46) TMGW IX,S.758f.、『ドイツ』、158-159頁。
- (47) TMGW IX,S.759、『ドイツ』、160頁。
- (48) TMGW IX,S.759-761、『ドイツ』、161-164頁。
- (49) TMGW IX,S.761、『ドイツ』、164頁。
- (50) TMGW IX,S.761、『ドイツ』、163頁。これは『ゲーテの民主主義』のゲーテの生の肯定について述べた箇所からの引用であるが、トーマス・マンは『市民時代の代表者としてのゲーテ』の中でも、ゲーテの生の肯定は「高貴さについての私の若い頃の概念を混乱させました。私は世俗の生活に対しては、繊細で無能、不適格であるということこそが真の高貴さであると考えてきたからです。」と語っている。TMGW IX,S.320、『ゲーテを語る』、48頁。
- (51) トーマス・マンとイロニーについては、次の書物を参照。洲崎恵三『トーマス・マンーイロニーとドイツ性ー』（東洋出版、1985年）。
- (52) 「私自身の教養は、・・・主としてドイツの土壌からその養分を吸収しておりましたし、評論の面での著述家および敬愛をこめた解釈者としても、外国人を対象としたことはほとんどなく、ほとんどもっぱら同国人に関心を向けてきたことを認めざるをえなかったのです。」TMGW IX,S.756、『ドイツ』、155頁。
- (53) 小塩節『トーマス・マンとドイツの時代』（中公新書、1992年）、12頁。
- (54) TMGW XI,S.1136、『ドイツ』、20頁。
- (55) TMGW XI,S.1140、『ドイツ』、26-27頁。
- (56) TMGW XI,S.1139、『ドイツ』、25頁。
- (57) TMGW IX,S.167、『ゲーテとトルストイ』、204頁
- (58) TMGW XI,S.1146、『ドイツ』、35頁。